展景

No.71



2013 年 9 月 28 日 発行 通巻第 71 号 オンライン版 第11 号

無二の会 muninokai.com

展景 71 号

目次

\sim ン ギ ン ヒ ルズ

小 野 7澤繁雄

心 をば何 に 散 ら 7 1 る 間に か 公園 に 人ら姿を消 め

花 遠 は フラ ワ ガ デンと違うよう しず か に ず か に立ち入りし

朝 ょ り 垣 O剪定を 7 お り ぬ そ 0) 家をすぎて木 0) 香 は 寄する

手 入れさ れ ぬ 竹 0) 林 を みてすぎ ぬ 縦横 に 線 が 交叉し 7 7

大きさを云うのにショウ、 ユ、 ヒメ、 ッサ ーとありこども動物園子と比較さる

ウ \forall と 口 バ 0) ちが (1) を説 明 み み、 たてがみ、 っぽで見せる

比也 企き 郡 \mathcal{O} 山 \mathcal{O} 間 に \sim ン ギ ン ヒ ルズあ り フン ボ ル $\stackrel{\cdot}{\sim}$ ンギン多くすむ

樹 O影 0) 長きが な か に 影 つ 青年 ∇ り 朝 を歩み

終端 O水 を 受けてまた 水がそこ ょ り 花 は 身開 き鳥

風 が 出 7 打ちあうよう を音 0) つ 篁 は 坂 0) 途 中 0) 空に

河

村

郁子

店せ 内なり 0) 織 物 見 7 ゐ 習 は が 感受 0) 力支 \sim れ ね る

織 物 \mathcal{O} 卸 1 な 3 わ が 父は 博 物 館 に 吾ぁ を 伴 \mathcal{O} き

縄 文 0) 埴 輪 に 父 O教 \sim は 帯 は 心 を 締 め る も 0) な り

人父 0) 意 匠 O打 5 掛 け に 嫁 ぎ ゆ き Ł 吾 は 未だ

歌 会終 \sim 速 歩 に 向 か Z 龍村 展」 父 \mathcal{O} 思 \mathcal{C} を抱きて 巡る

正 倉 院 御 物 O復元 織 物 に シ ル ク 口 \mathcal{O} か そ けき薫 り

法 隆 古っ 代だい 裂れ O文様 を 模 す る わ が 帯 龍 村 0) 帯

照 明 \mathcal{O} 光 に きら め 織 絲 に 交響 曲 0) 荘 厳 感

方 ょ り 文化伝 は り 千 年 余 和 歌 と 物 日 本 \mathcal{O} 財 宝

風 干 に わ が 持 7 る帯 眺 め つ つ 父 0) 目 利きを敬 S 7 を

仮の世の終の楽しみ岩魚釣る

岩魚美し月清水とふ淵よりのは、つきしみづ

青淵の岩魚手合せいただきぬ

まづ触れてみよと君から山椒魚

雪渓の奥は激流かも知れず

無抵抗主義者のやうに泳ぐなり

豪雨とや龍棲む滝のさらはるる

鳥獣の子を捜す声梅雨出水

畑の虫と来世の話夏の風邪

炎昼の雉鳩眼全開か

ド 丰 ユ メン タ IJ 映 画

布宮慈子

小 Ш 紳 介 0) ドキ ユ メンタ ij 映画を六本観 た り 二 日 が か り ŋ

「三里塚」 撮 り たる 小 Ш プ 口 皆 で上山 市 牧ぎ 野の \sim 移 n 住 みに

つ か け はゴミ処理場 0) Р R 映画 グ IJ セ ンタ 訪問 記 制 作

シ ヤ ヤ と蚕が 桑 0) 葉食 む音す \neg 牧 野 物 養蚕編』 に

御ぉ 蚕 ざ 様 ま は神 0) 使 S か 桑の 葉 の若葉大葉を選びて与ふ

『牧野物 語 峠 は 詩 人を撮 りをれ にばほん たうの真壁仁見し思ひにて

知らざりき稲 0) 開花 は二時 間 余 \neg _ ッポ 国古屋敷村』 映 す

吉祥寺バ ウ スシ ア タ で 観 0 0 0 年 刻 み 0) 日 時 計 牧 野 物語』 たどる

本は レギ ナ・ウ ルヴ ア -監督の "HARE TO KE 小 Ш 口 ダクショ ンとの出会い

どこまでも熱き男よ饒舌な 小 Ш 紳 介監督 記録 0) な かに

疎 開 地 O庭 に 鮮 B か な り と思 S 出 づ 仏 前 0) サ 力 ケ 1 ゥ

青 筋 揚 羽 ゆ る B か に 舞 Z 学習室 0) 窓 下 面 ア ベ IJ \mathcal{O} 花

月 度通 Z 眼 科 \mathcal{O} 受 付 に け S は 墨 田 \mathcal{O} 花 火 が 挿 あ

ま だ 夏 Oは じ ま り な る に 蟬 ___ 匹 () O5 絶え を 通 路 に 拾

空巣 用 心 \mathcal{O} 緊急 回覧 わ が 地 区 き 七 軒 に 被害あ り を伝

夏 期 巡 回 ラ ジ 才 体 操 わ が 町 が Z と 最初とぞ吾も 参 加 せ り

Z 0) 暑き夏 \mathcal{O} り 0) 改 修 工 事 友 住 む ビ ル に 足 場 組 ま る

ポ ル 建 7 る 金 属音 ح 作 業員 0) 覆 \mathcal{O} 張 り ゐ る 声 聞

朝 ょ り 削っ り O音 \mathcal{O} 絶 Ž 間 な ときを り 足場 を 移 動 す る 見 ゆ

改 修 工 事 は 夏場 が 旬 ょ 駅 前 0) 棟 0) ル 0) 作 業 は

曲がり角の向こうに

結城 文

ステン ド ガラ ス透け る 日ざ は交響す天使飛 び交ふ 円 天井に

薔 薇 窓に さ 入 る 夕 日 Oま ば ゆ さ に わ れ は き り に 目 を ば たたく

薇 窓を透き < る 光 0) 色 しもちて 言 葉 づ か に 立ち あ が り 来よ

心 0) 飢 え が 生 3 出 た る 詩ル 句ズ \mathcal{O} 花 繚 乱 \mathcal{O} 粛 に 踏 3

消 が た き 不条理 0) 火 は そ 0) ح と と 7 7 きぱきとこ な す 日

乾ききり 枯 葉 O音 は V つ まで ŧ 街 ゆ 私 を放 7 れ な 15

白 昼 O重 き夏至 0) 日 ア ス フ ル 卜 に 印 され う わ が 影 短

迷 Z なと道 路 標 識 0) 指 させるそ O() づ に も 行 き先 は な 15

きらめ き つ つ 降 る 噴 水 を過ぎてきて B やさは B か な 心 に な り め

曲 が り 角 0) 向 う に 明 日 を約 つ つ夏の 夜 0) 月 ビ ル に 隠 るる

池田桂

Ш 蟬 Oジ 1 ジ 1 と鳴 しばらく を木蔭に寄 り 7 耳を澄 ま

なだら か な 山 路 たど れ ば 何 処よ り か 笛 か す か に 聞 え るな り

ジジ と鳴 き 飛 び 去る 蟬 0) 後を追う 子等は手 に 手 に 網 振 り 上 げ

シミン 0) 声 \mathcal{O} たと止 む 静 け さ に 記 憶 \mathcal{O} 中 ま で 空白 「となる

ね む 0) 木 0) 葉揺 れ に 蟬 は 飛 び立ち ぬ気だるき午 後 \mathcal{O} 風 吹きく れば

腰 ほどに 伸 び た る雑草 か き分け 7 今 朝 ŧ 雀 5 0) 餌 台 に ゆ

空 缶 を 吅 け ば 雀 5 0) 姿見 え今年 は 羽 増え る 数あ り

餌 台 に 飛 び る雀 は 交々ななも に チ チ と 嗚 き声 残 飛 び去る

除染する業者の車両数台が道幅広く占める一日

繰 り 返す ほ どにニ ユ ス は 死者 0) 数増えきて洪 水 0) 悲惨を映す

近江気まぐれ文学抄 40

『小倉百人一首』――逢坂の関

新関伸出

る。 して、人々に親しまれるようになった。 にかけての勅撰和歌集から選定し、後人が改訂を経てまとめた百首からなる秀歌集であ 『小倉百人一首』は、 恋の歌と四季折々を読み込んだ自然の歌が多い。 はじめ藤原定家が十世紀の『古今集』から十三世紀の 江戸以降は、「百人一首かるた」と

で詠まれている歌枕が「逢坂の関」二首と「逢坂山」 これらの百首の歌枕は全国に及んでいるが、近江を舞台にした歌が六首あり、 一首である。 うち三首

畿圏の東端の外門的な役割を担っていた。 伊勢「鈴鹿関」と合わせて三関と呼ばれ、 にあったため、 国境に天武天皇の命により設けられている。 この近江の歌枕 衆人監視に都合がよかった場所である。平安中期には、美濃「不破の関」、 「逢坂の関」は、 七世紀に山城 都の警護や軍事上、重要な関所であり、 東海道および東山道、 (京都) と近江 (滋賀) さらに琵琶湖の出入口 の逢坂山 また近 0)

されている。 どこにあったのかは特定されてはいない。 音羽台の逢坂小学校前の二ヵ所に建てられていることからも、実のところ「逢坂の関」が、 ところが、 「逢坂関趾」 の石碑が、 逢坂峠 現在では大津市逢坂二丁目の長安寺近辺と推定 「蟬丸神社」近くの国道一号線沿いと大津市

これやこの 行くも帰るも 別れては 知るも知らぬも 逢坂の関

(第十番 蟬丸

首となっている。 う「会者定離」の無常観や人の世の集合離散を思わせて、 らぬ」、「別れる」 「逢ふ」 の三組の対立する言葉をリズミカルに 「逢坂の関」 に収束させ、 も知らない人も、 人生の縮図の出会いと別れを戯れ歌ぎりぎりのところで押しとどめた妙がある。仏教でい いる。名所旧跡である「逢坂」を紹介しつつ、そこでは人が「行く」「来る」、「知る」「知 「知らぬも逢」と「逢坂」の 「これがあの、 別れてはまた逢うという、 これから(東へ) 「逢」とで、人が「逢ふ」と場所の 旅立つ人も(都 逢坂の関なのですよ」となる。 単なる名所紹介に終わらない一 へ)帰る人も、 「逢坂」が掛詞となって 知っている人

言われている。 き親王から琵琶の秘曲「流泉・啄木」を聞き覚え、 蟬丸は、『今昔物語』 盲目ながら琵琶の名手であるが、 巻二十四によると宇多天皇の皇子敦実親王の雑色として仕えたと 詳伝は不明である。 その後逢坂山に庵を結んで暮らしたと また、 公卿で雅楽家

いう。 の博雅三位こと源 博雅が逢坂まで三年間通い詰めて、とのいろまさ ようやくその秘曲を伝授され

名にしおはば 逢坂山の さねかづら 人にしられで くるよしもが

(第二十五番 三条右大臣)

ば来るように、誰にも知られずにあなたを連れ出す手立てが欲しいのですよ」となる。 歌意は 「逢って寝るという名を持っているならば、 その逢坂山のさねかづらは、

る恋心とも読み取れる。 たいとする思いとあなたに逢うために人知れず来る方法がないものかと思い悩む姿と解せ 樹皮の粘液を整髪に用いたことから美男葛の別名がある。 来ることを言いかけたものとなる。 と共に寝る」の意味がある。また「かづら」は、 掛詞は「逢坂」の「逢ふ」と「さねかづら」 この赤く熟した実が、恋人に思えてくるのは、私だけであろうか。相手をたぐり寄せ どちらにしても情の深い思いを吐露していることに変わりない。 読み込まれた実葛は、 0) 蔓が長く伸びて、手でたぐるから、 「さ寝」であり、「さ寝」は「恋し 果実は球状の小液果で、 マツブサ科のつる性常緑低木で 強引にかつ悶絶す 赤く熟 人の い人

管弦に優れ、 臣となる。醍醐天皇の外叔父。京は三条に邸宅があったので三条右大臣と呼ばれた。和歌、 三条右大臣とは、藤原定方 紀貫之らの後援者であった。 (八七三―九三二)で内大臣高藤の 次男、 参議を経て右大

夜をこめて 鳥のそらねは はかるとも よに逢坂の 関はゆるさじ

(第六十二番 清少納言)

坂」に「逢ふ」を掛けている。 孟 掌 君の故事に出でくる) 歌意は だまそうとしても、決して私は逢うことを許さないでしょう」である。 「夜が明けないうちに、 函谷関ならともかく、この逢坂の関は決してホルムニマカム
あい鳴きまねで人をだまそうとしても、 この逢坂の関は決して許さないでしょ あの 掛詞は「逢 (『史記』

命婦を生む。 清少納言の当意即妙の機知と、漢文に対する素養の深さを実感する才気溢れた歌である。 と「あなたに逢う逢坂の関」と戯れできたので、即興で切り返し贈った歌といわれている。 女性である。 中宮彰子に仕えながら『源氏物語』を著した紫式部と並び称される、 れて」と言い寄ってきたので清少納言が「函谷関の空鳴きのことですね」と答えた。 『枕草子』で名高い清少納言は、 この歌は『後拾遺集』の詞書によると、大納言藤原行成が朝早く 定子没した後は、 宮仕えに先立って橘則光に嫁して則長を生み、 零落して不遇な晩年を送ったと言われている。 清原元輔の娘であり、 一条天皇の皇后定子に仕えた。 藤原棟世の妻となって小馬 宮廷文学を代表する 「鶏の声にもよおさ

ずれも人工的な感じである。 東京の街はどこもかしこもアスファルトやコンクリートで覆われ、 自然や野生を感じさせるものが何もない。もちろん公園もあれば街路樹もあるが、 ろくに地面が 見え

そう思っていたら、 驚いた。なかでも驚いたのは、 ネコジャラシ、その他もろもろの雑草が丈高くびっしりと生い茂っているのに気が 近くの、 しばらく前に取り壊された家の跡地に、 タケニグサが茂っていたことである。 つの 間にかア つ 力

ことである。 タケニグサを初めて目にしたのは、 会津の田舎町で暮らしていた小学校低学年のころ

な、 と太い茎は粉がふいたように白い。 らいもあるだろうか。 になっていた。 コボコと沸き上がってくる水に直接口をつけて飲むのが、 その窪地にはさまざまな雑草が茂っていたが、 町はずれに水の湧き出 大きな葉をつけた丈の高い草が生えているのに気がついた。葉の大きさは子供の顔ぐ きまってそこの水を飲んだものである。湧き水の縁に膝をつき、 私たち子供は、そのあたりに遊びにゆくと、 いくつも深い切れ込みがあり、 している窪地があって、 その姿がひどくたけだけしく不気味に思われ、 あるとき、それまで見たこともないよう 湧き水まで石段づたい しかも葉の表面は緑色なのに、 わけもなく楽しかったのだ。 のどが乾いていようといまい 身をのり出して、 に降 りられるよ

「あっ、

それがほんとうに毒草かどうかはもちろん、名前さえ知りもしなかったのだが。 「々に叫び、みんなでバタバタ逃げだしたことがあった。と言っても、実のところ私は、 と叫んでいた。 するとほかの子供たちもつられて、「毒草」「毒草。 触るとあぶない」と

ようと思い立ち、 子供時代のそのときのことがにわかに思い出され、 図書館に出かけた。 この際、 その植物のことを調べてみ

生えていることに気がついた。 ように中空になっているところからこの名があり、折ると黄色っぽい汁液が出る、 そう言われて気をつけて探してみると、 植物図鑑によると、 この植物は山野にふつうだが、 この植物の名はタケニグサ、漢字で書くと「竹似草」で、茎が竹 とある。 子供のころの私の勘は当たっていたようである。 その空き地以外にも、 とくに荒れ地によく生える、 大通り沿いのあちこちに とあった。

タケニグサが茂る東京は、 やはり荒れ地なのである。

〈那須通信16〉

私の事情

源藤文子

そろそろ締め切りが近づい 原稿用紙に書いていると、 、ている。 直したくなる箇所にであう。 雑記帳の下書きを、 原稿用紙に書き写してみる。

ているのがもったいなくなって、 ことばをみつけながら、 雑記帳で訂正の文章を練る。 外仕事に切り換える。 何度書いても先に進まず、すわっ

に吸い込んでみる。 アを開けた瞬間、 曇り空がいつの間にか明るくなって、 乾いた初夏の風が届く。 空気が甘く感じられて、 みどりがさやかに映る。 っぱ

の乾きを確認しながら棚をめぐる。 外もいいんだヨネ。 水を必要とする盆栽たちの姿も、 視界に入る。 水やり開始。 如雨露片手に、 鉢中の表土

それぞれの棚をきれいにすると、 向こうの木立で、 水やり途中で見かけた棚上の落ち葉や花びらなども、 カッコウが鳴いている。 盆栽たちの輪郭がくっきり見えて、気持ちが良い。 刷毛で一掃する。



書こうとする思いなどとっくに忘れて、考えることをしなくなった時に、 そんな中、 ボンヤリしたところから徐々に鮮明になって、あらたな言葉が降りてくる。 言葉は見つか

るようだ。

忘れないうちに、 作業場のメモ帳に走り書きをする。

外仕事も一段落、 さっそくメモ帳を和室に持ち込んで、 原稿用紙にむかう。

改めた文章を挿入して、一枚が仕上がる。

二枚目は滞りなく、次いで三枚目を清書している途中でひっかかる。

再度、

書いては直し、 ては直し、書いては止まり、なかなかゴールに辿りつけず、こんなことを何日も繰雑記帳の出番、あるいは他の仕事をはじめるか。

り返して最終に近づく。

たくさん書くので○・五ミリのボールペンはなくなるいっぽうだ。

パソコンにしたら、と言われるかもしれない。

困ったことに、人ができても私にはむずかしく、 ペンを握る感触や紙にむかう動作がな

いと文章がつづれない。

ペンも紙も無駄遣いしているとはいえ、 馴染めないのだから、 今は仕方がないと思って

人それぞれ、 事情もいろいろある。

山 麓だより

女 0)

民運動会を抜け出してまで芽かきに追われ、暑さに耐えてタマ落としと皿敷きをした。 日程休んで「いよいよ来週から出荷だぞ」という七月二〇日過ぎ、 まだ雪の残る三月から種をまいて苗を育て、 田植えの準備をしながら畑に植え付け、 ケイコさんから電話

これだば出荷できねもんのぉ。もっけだぁ……」 何でもなかったんども、 「もっけだどものぉ (申し訳ないけれども)、 今日見たら三分の一は葉っぱも実も黄色くなっでしまって なんだか仕事にならねみでだ。 昨日までは 0) お。

かった。 れたケイコさんから、 長く続いた雨ですっかり弱ってしまったメロンは、 生き残ったメロンを数個「仕事がなくなったお詫び」だと言っ 残りも日を追うごとに黄色くなって、一二○○本がほぼ全滅したと その後の猛暑を耐えることができな て届けてく

ケイコさんは痛々しく笑ってみせた。 足で去年の半分しか出荷できなかった。 ケイコさんちは、 コメと畑の収入がほぼ半々の専業農家だ。 「お天気のすることだから、 今年は春先の大根 しょうが ね う _ É

は野菜も花卉も屋内での水耕栽培が主流だ。日照も害虫もコントロールでき、収穫物を人ゅゅ。 力でエッチラオッチラ運ぶ必要もない。数量も行き先もバーコードで管理されてクレー それでは「産業」としての競争には勝てない。だから、ヨー 無人のレールの上をコンテナが整列する。 -ロッパ の大生産地

東日本大震災で津波による塩害を受けた地域の 日本でも消費者の「有機」志向の高まりによって、この それでいいのかね? "復興策" としても注目を浴びている。 「野菜工! 場 は増 加 しており、

頃からずっと。 るのだが、 を営む一家で、 うちから八○メー お母さんらしき人に会ったことがない。もう六年間も、 じっちゃんとばっちゃん、それにお父さんとはよく顔を合わせるし話もす トルほど離れたお隣には、 小学校低学年の女の子が 女の子が五歳くら ひとりいる。

た ままにできず、 あれがお母さんなんだな、 ある日、その女の子が家の前の道路で、三○代後半の 同じ部落のノリコさんと焼き鳥屋で一緒になったとき、 なんで普段は見かけないの かな……。少し下品な好奇心をその 女性と絡み合うように遊ん つい聞いてしまっ で

Photo : Suzuki Kyoko



ミツバチの塊:この巨大な松かさは女王様 を取り巻くミツバチの塊。4日間くらいこ の状態だったが、女王様が飛び出すとみな 一斉に後をついて行ってしまった。どこか のメロン畑からの脱走ミツバチ



メロン苗:ケイコさんちではハウスと露地 を合わせ、約2000本のメロン苗をつくる



ヤモリ:毎年、夏になると、毎晩7時半過 ぎに居間のサッシに現れる。去年と同じヤ ツなのかな? 今年は大小3匹を一緒に見 たので、家族が増えている?



着果完了: 雌花にミツバチが頭から突っ込 むと、ほぼ100%着果完了! この状態の ミツバチは密を吸うのに夢中で、人が作業 していて葉っぱがガサガサ揺れても気に しない

どもが恋しがって恋しがって離れなぐで、 六○歳前後の息子とその両親が営む酪農という家族農業に、 いになったって評判だっけぇ」 あるいは、彼女が東京で働くことは家族農業で得るよりもたくさん稼げるのか。 けっして聞けないナ。 一人目は中国人で二年くらい居たらしいが、 そうすることを、 女の子のお母さんは韓国人で、 国に送るカネがいるんでねが? あのヨメさん、 ん ? 女の子のお母さんがやっ 祖父母を、そしてこの家族の 見かけないのは三ヵ月どころじゃないよ。 たい 東京に行ぐようになって、 彼女が希望したのか、 へんなんだど。 てきた。 あの家にとっては二人目 "事情" 年に三ヵ月間の里帰りの後、 彼女もまた、 んだよの 彼女は必要とされない たまに帰ってくると、 家族が望んだのか。 をどのように理解 すっかり垢抜けてき お、 子どもだって 年に三ヵ月く 0 聞

受け止めていくのだろう。

そのカネが必要なのか。

さみしいよのぉ。

んども、

「東京で働いてんだと。

だという。

リコさんによると、

て来なかった。そして、

韓国に帰るらしい。

てみたいけど、

女の子は今後、

母を、父を、

O N M 丸山 弘子

立っている釣人すわっている釣人あいだ折々声が渡るも	隣り家にあさがほ青く咲き継ぎて夏の果てなる暑さ戻り来	暑き日の日課にてバケツ一杯の冷水金魚の甕に入れやる	いちにちの朝夕の間に季移る夕さればまた雲薄くして	旧盆は一大イベント過ぎゆけば秋に向かへりみちのくの空	友の家の工事今日より盆休み足場の覆ひ片寄せてあり	レンガ畳そのすき間より砂浮いて雨の匂いは昨夜のものか	断水に関係あらず白百合は去年咲きたるやうに咲きをり	未だ稚き球根なれば花数は二輪のみなりカサブランカの花	ソージキの音する家なりおさなごの声のからめば機械音やさし	梅雨明けは未だしちょいと小ぶりなる梅干に持つて来いの谷沢梅生る	玻璃戸打つ雨風はげし梅雨明けのざんざ降りとはよくぞ言ひける。	蟬声はいまだもきかず梅雨明けは近い近くない終日くもり	あれッ蟬だ蟬の声なり山越えの道はみどりがあふれて迫る	産卵は無事にすみしや黒揚羽ボロボロなるが地に喘ぎをり	つゆの間の朝の田にして水光る一枚ずつに鷺一羽ずつ	雀らは何処に行きぬ梅雨入りといふ山形の外の静けさ
9 月 5 日	9 月 4 日	8 月 29 日	8 月 23 日	8 月 20 日	8 月 12 日	8 月 1 日	7 月 26 日	7 月 21 日	7 月 16 日	7 月 12 日	7 月 7 日	7 月 5 日	7 月 4 日	6 月 29 日	6 月 22 日	6 月 19 日
Ο	N	M	0	N	M	0	N	M	0	N	M	0	N	M	0	N

9 月 13 日

N

M

音立てず西の彼方に上弦の月かたぶきぬ今日は命日

ひさびさの涼しき目覚め耳もとのラジオは「五輪招致東京に決定」を告ぐ9月9日

前号作品短評 A 〈小野澤〉

●傾きしトタンの屋根に生る雑草そのままにして二年経たり

という歌が二首、 こえてきた郭公の声の歌、以上十首ことごとくが身辺のうただ。 の夜毎の蛙声の歌、日除けにゴーヤを植えんという歌、粗相する子猫の歌、 「缶叩くおと」一連は、まず震災後の歌が二首、雀の餌付けに缶を叩くことをして十五年、 同じように空缶を叩いて、鯉に餌を撒くようになった歌が二首、 明け方近く聞

板に亜鉛をメッキしたもの。 のままにして」に、そのままにしかできなかった、というか思いが残るようだ。 引用した歌の「二年」、読みはふたとせか。トタンが懐かしい感じだ。 トタン屋根は雨が降るとすぐにわかる。音が激しい トタンは薄 のだ。

子猫の歌を挙げる。

粗相する子猫に向かいて徐に捨ててしまうよと繰り返し言う

アンスは独特だ。 顔を近づけて言っているような。 いろいろ生き物との関係のなかで、猫が一番近いのかなと思う。 徐に、その上に繰り返し、というところに出ているニュ

中寿(八十歳)、下寿(六十歳)といわれる、 ネットで中寿を検索したら、長寿の段階を上中下であらわしたもので、 同期会〈二〇一三・四月十日〉 中寿迎える会と副えらる という。ちなみに三首目の歌は、 (百歳)、

それぞれの八十年を生きて来し互いの皺にかがやき満つる

殻町」は、この歌にみえる。 同期会の、それぞれのやりとりに、思い出も含めて十首がつかわれた。一連タイトル

で日本橋人形町、東で日本橋浜町、 これもネットでしったものだが、 どの歌も過不足がなく、 会場は我が成長の地・蛎殻町幼ともだち三人と会いぬ 必要なことが詠われた。 南で日本橋箱崎町、 蛎殻町は、旧日本橋区にあたる日本橋地域に属し、 西で日本橋小網町と接する、

女子には具体的だ。六首全体にこころ踊りと懐かしさがにじむ。 格別なものがあるのだろう。 ひな市は、 一連タイトルが「ひな市」。うち手前六首がひな市関連の歌で、 ●その日よりスカートはけるうれしさよ 次の歌にもあるように、月遅れの四月にあったようで、 とくに「その日よりスカートはけるうれしさ」とあるところ、 ひな市の立つ春待ちをりき 引用の歌は冒頭の歌。 その日を待つ心持には 布宮慈子

ひな市は月遅れなり雪国に春の光のやうやく射して

たりがあるようだった。 一方上京した上野公園での、ラファエロ展を見るためだったか、 かすかな違和にも心当

つ来てもベンチの真中に仕切りあり上野公園棘のやうなる

前号作品短評B

になった。 さを感じることがある。動詞を重ねることで、 句の「打ち打つ」という表現。噴水を飽きず眺めていると、あらためて水の勢いや水の重 水の音をさせているという、 「もどりきて」は作者ではなく、 ここでは水の重力だけを際立たせている。 もどりきて沼のほとりに噴水は水のおとにて水面 ごく当たり前のことを歌にしているわけだが、ポイントは下 水が循環して戻っているさまだろう。 そこを強調している。 作者独特の感じ方が、 打ち打 つ 素直なかたちで一首 ほかの景は消し去ら 噴水の水が落ちて 小野澤繁雄

背丈ほどのびたる庭の草の間にリトルピープルいつよりすめる

よるものだろうか? 語性を感じさせる歌である。「リトルピープル」は、 なにか具体的なものを指すわけではなく、作者の心の目が捉えるものかもしれない 「偉大な兄弟(ビッグブラザー)」との対比としての「リトルピープ 村上春樹の小説 \neg 1 Q 8 4 』 に

あれかと思うひともいるだろう。意外に身近に見る花なのだ。紫やピンク、白などが多い さん」という最後の歌、 あとの四首、 似ており、 後半は同窓会に関した歌だが、米寿を迎えるという佐藤さんは同級生ではないだろう。 駅前の喫煙の場所だろうか、花壇に同じ種類のさまざまな色の花が咲い 黄色もあるようだ。ひとところに十色も咲いているルピナスを見てみたいものだ。 「ルピナス」の語感がいいと思って興味をもった。調べてみると、 スモーキングエリアの傍の花壇にて十色に余るルピナスの花 花が下から咲き上がるため、ノボリフジ(昇藤)とも呼ばれるとある。 それぞれの名前とともに具体的な描写がある。 心の隅にある青春のとげのような思い出は消えはしないのだ。 「涙したる吾を揶揄せし田中 花の様子がフジに ているという

交差点行き交ふ人の数ほどの願望渦巻く声なき声に

埋めようがない。 と周りの景色には、くっきりと境目がある。自分の中に流れる時間と他者の時間の差異は、 「声なき声に」と題する一連に流れるものは、 孤独感というより孤高 0) 姿勢である。

幾筋もの傷のやうなり地図上に入り組み引 人群るる祭りの喧噪われの名を呼ぶもののなき無縁の広場 かれ し境界線は

石畳の石てらてらとわれもまたここ過ぎゆきしものらのひとり

生きることの寂しさを引き受けながら、 なお歩みを止めることの な V 強靭な精神を思っ

次の一首はスカイ 地上より離れつつ天を指す塔の投網のごとく光しぼりて ・ツリ の描写であろう。 「投網」 の直喩が新鮮だった。

●橅林に海底の石 風光る

新野祐子

身を浸すことが可能となる。「風光る」が、さわやかな印象を与える一句。 隆起して山になる。その現実を目にするとき、瑣末な日常を離れ、宇宙的な時間の流れに トがあり、これらが動くことによって巨大なエネルギーが発生。かつて海だったところが 山に行けば、海の底だった痕跡を見ることができるという。日本の周辺では四つのプレー

夕蛙耳は胎児のかたちして

「夕蛙」は春の季語。カエルの声、耳、胎児の連想は楽しく、生への肯定をあらわしている。ゅゞゕゖゖ

P 会員名

兄さんと実家の片づけに群馬を往復した。

た幕の内弁当だ。 高崎駅東口で落ち合って、 具の一部がえらべるという。 途中、 一宮の貫前神社で昼にした。 兄さんが駅ナカで用意し

らは仕事で時間がとれないようで、また兄さんと二人になった。 ようなことで一部は処分待ちだが、 衣類、 布類の片づけには、 妹につきあってもらって、 ずいぶん助かった。 やはり男ではむつかしい。 おおよそが片付いた。 割り振りの 四月か

か可燃物、プラスティック、 家族個々に関係する写真や記録、なんだか判らないが健康器具、鋏や工具類などの金属、 から片づけにかかってすぐに草履や桐下駄などが出てきた。 居間で、受話器の載っている事務机の上、袖、ダンボールの箱で幾箱か詰まっ 後者のそれぞれを袋に詰める。 みな、 梱包されている。

がある。 んにいうと、そろそろ引き上げようかという。 昼前から雨でそう暑くない。 やりとりは子供の頃のようだ。 そのうち、 動いているせいかウンチが出たくなった。 水が使えないので、 早々にきりあげる必要 兄さ

簿があった。 戻ってきて、 もちかえったものを点検しているなかに、 高校二年のときのPT A会員名

販売業、 寝しなに、 名前、 など具体的で詳しい。 職業がたどれた。タクシー運転手、 ねそべって読み始め た。 同じ組の 工員 ところ、 染色業、 同級生の名前の メリヤス会社、 ところで、 バッテリー 0 住

泣いてしまった。 かない名前。 親の職業をしって、 なんだか大切なことがうしなわれてしまったような、 妙に納得されるようなところがあった。 顔がうかぶ名前、 そんなことで、 見覚えし

結局は寝てしまったが、 片づかないものにであってしまったようだった。

0) 血液型は何型ですかと聞くので、 今日から春の交通安全週間がはじまるという日に、 びっくりした。 突然、 隣のお姉さんが来て、 あなた

がつく。 交換しようとのお話に、 お互いに一人暮らしだから、 年寄りを気づかってくれる思いやり 病気や怪我をしたり事故に遭ったときなどの用心のために の心だったと、 後になって気

結局は自分自身に無責任なのかもしれない。 に行くし、そのほかに困ったことができたら、その道の人をたずねればい 自分の血液型など、 すっかり忘れてしまって覚えていない。 病気になったらお医者さん いという感じで、

待っている。 が広がってきた。 うこともあって、 んでいた転居前の住所も同じ町内だったこと、それに同じ県の田舎から上京してきたとい 今回の引越しのときに持ってきた植木鉢のほおずきを庭に直植えにしたら、春先から根 昨年の歳末、 隣に引越してきたお姉さんとは不思議なご縁を感じ 茎が伸びてきたら根分けしてくれると言うので、 つも親切に声をかけてくれた。年齢は、私より一回り以上も下である。 大きめの鉢を用意して て V る。 長 1 あ V だ住

ジャ ていた夫に介護が必要になったとき、そのお姉さんに相談したところ、手続きやケアマネー しまったので、 お姉さんは、 ーの紹介をしてくれた。 介護の話はそれで終わりになった。 同じ町内にいたころから介護の仕事をしていた。 準備ができたとたん、 夫は入院したまま家に帰れなくなっ 以前、 入退院をくり返し

がいてくれるので安心して毎日の暮らしができる。 なくなっても介護してもらえるように、 親戚よりも近くの他人というように、 になったことを忘れかけていたら、後を追うようにして隣に来てくれ 今度は私自身が世話になるかもしれない。 今から頼んでおこうと思いつつ、 心強いお姉さん $\langle \cdot \rangle$ う動け 0)

から予約の申し込みをしても二ヵ月待ちぐらいになるとのこと。 のあ いだ眼科のお医者さんに、 そのときには血液型を知らせてもらうことにしよう。 そろそろ白内障の手術をした方がい 手術の前には体の検査を いと言われた。

ぼに水引きが始まる。 \mathcal{F} 月半ばごろになると、 田起こしはほとんど終わり、 ひと休みすると、 それぞれ 0) 田ん

してゆく。 いることなどは見かけない。 のが、最近では大型トラクターで天地返しが行われ、 冬から春にかけて、どこの 緑一色だった見渡す限りの田は、 田も雀のてっぽうなどの、 誰ひとりとして、 田 の特有の雑草がはびこって みるみる茶色の大地に変化 人力で作業をして

暦ではもう立夏が過ぎている。

色に濁った水面が現われる。 そして、 あっという間に水が張られ、 湖にでもなったかのように、 次々と遠くまで、

かがめて農作業をする姿があった。 幼い頃に見た情景は、小さく区切られたそれぞれの田には、 四、五人の大人たちが を

の中には、 ところが現在では、 数台だけの大型トラクターが動いており、 人影は全く無く、 小型耕運機だったものから大型になり、 作業も数日で終わってしまう。

たのを、 うほどの人数が居り、夕暮れになっても、手元が見える間は、 田植えも、多勢でのころは、どこにこんなに農業をする人たちが居たのだろうか、 提灯を持って迎えに行ったのを思い出す。 水田から上がろうとしなかっ と思

わりようなのである。 二、三日、 しかし、機械化された田植機では、一人か二人だけで、 そこを通っていない間に、 太陽に光り輝く早苗田の別世界ができるほどの変 一切が片付いてしまうのである。

具合が複雑だったせいか、梅や連翹、それその年によって、植物の花の時期には、 こぶしや木蓮などが花の散らないうちに、 そして満開になる桜の開花期も遅く、桃やりんご、 順序がずれたりするのだが、 次々と咲き継いだような気がした。 今年は寒暖の続

たので、 そして、 びっくりした。 黒ずんでいたかのように見えた里山の色は、 木々の芽吹いた萌黄が、 針葉樹林とは、はっきり区別できるように色付いてき この晴れの日の続いたせいか、

していて、 常緑樹も若芽を持っているのだが、 差別をされて注目されないから、 申 し訳なさそうに遠慮しながら、 スネているようにも見えた。 目立たないように

でも、 その証拠に、樫の木も枇杷の木も、 芽吹きはゆっくりでも、しっかりと主張している状態は、 何で今の時期に落葉なの、と声を上げたくなるほど、 毎年感じてい

毎日決まって、石畳の上に枯葉を散らしている。夏落葉なのである。

更ながら、自然は偉大であることの、再認識をせまられている毎日である。 植物の落葉は、秋に紅葉してから落下するもの、と思い込んでいたつたない知識に、今

「清紫会」だより

繁雄・PTA会員名簿 ◆ 第 107 回 〈提出作品〉池田桂一・夏の始まり/市川茂子・隣のお姉さん/大石久美・無題/小野澤 平成二十五年五月十六日(木)、会場・文京シビックセンター三階A会議室 、林博子・雪形/松井淑子・折り紙の鶴

第 108 回 六月二十日 (木)、 会場・文京シビックセンター三階A会議室

◆ 第 109 回 子・ケンチャン/結城文・ピアノ 〈提出作品〉大石久美・それから/河村郁子・あとがき(案)/林博子・今年竹/丸山弘 七月十八日(木)、 会場・文京シビックセンター三階A会議室

博子・あじさい/松井淑子・毒草/丸山弘子・キナコ

〈提出作品〉池田桂一・イノコズチ/大石久美・熱中症かしら〉

小野澤繁雄·

改造品/林

(松井)

二の会短信

切ってやめてしまう自分を想像するといたたまれないときがある。でも、 抑えている感情が会員の前で爆発してしまうことを恐れている。 な態度に、 なのかもしれない、と思ったりしている。 てきてくれた会員の人たちのことを思うと、 気持が萎えていることである。若いのだからと、済ませてしまえばいいことなのに、 んでいることがある。 百名近い老人会に所属しているのだが、若い会長の少々嫌 軽はずみなことを避けて、 本来が短気気質なので、 我慢することも皆のため 自分を頼りにして従い
気気質なので、啖呵を

い夏には、 ◆蒸し暑い日が続いています。とくに夜は、一夜一夜が命がけです。 エアコンがないので、窓を少し開けておく、扇風機を使うなどしていますが、朝がくるとホッ 職場も節電中なので、 何か懐かしいものがあります。 いろいろ注意しなければならないことがあります。 枕にしがみついてねていま それでも暑 小野澤繁雄

然ることながら、天平、奈良、平安の時代から江戸時代を経て現代に至るまで、日本文化の格調 かりでなく意匠美の探究の足跡に深く感動しながら会場を一巡した。織物は金襴緞子の華やぎも に貢献していると知った。次は、 ◆京都の老舗「龍村」の美術織物の展示が、東京高島屋で開かれた。父は織物卸を営んでいたの 私にも関心があり、銀座での歌会のあと会場へ馳せ参じた。 新歌舞伎座の緞帳を、 その迫力を浴びられる席で鑑賞したい。 創業より四代目に至る、技術ば

傷跡は、まだ消えていない。NHK朝ドラ「あまちゃん」効果で「北限の海女」の久慈が注目を て説明しがたい雰囲気からくるものだろう。 とも言えない穏やかで心地よい気分となった。 ていた。前夜は大勢で酒を酌み交わし、 浴びていることをうれしく思う。ところで、この度の目的は研究会の講師であった。 十数年ぶりに大学時代を過ごした盛岡を訪れる。震災の影響が少なかった地域だが、 後輩を含む大勢の聴衆の前で話すことは、 帰り際盛岡冷麺で締めてきた。久々に旧交を温めて、 その要因は、 少しは気が引けたが、いつの間にか慣れ 東北人同士の素朴さと誠実さ、そし 同級生だけ 新関伸也 σ

であり人災です。 拡大造林により、 沢という沢が氾濫し土砂崩れを起こし、 七月十八日、私の住む山形県白鷹町は、 森林は水源を涵養し土砂流出を防ぐ緑のダムではなくなり、 麓の家屋、田畑に甚大な被害が出ました。 少なくとも五百年以来の豪雨に襲われました。 今回の災害は天災 戦後のスギの Щ 中の

◆先日、 とに観光バスがつぎつぎに着き、 テレビ・ドラマ「八重の桜」 所用で会津の喜多方にいったついでに会津若松の鶴ケ城に寄ってみた。 押すな押すなの人だかりである。 の影響だろう。 テレビの力恐るべしである。 名古屋あたりからのバスもあ すると驚いたこ 松井淑子

ので、 ◆この間、 ら帰って家に入ったあとは、一度も外に出てない、ということが救いであった。予備の鍵はある 件落着はしたが、大いに散財してしまった。 がけないところから前の鍵が出てきた。スー ているので、 当座の生活に支障はない。ただ思いちがいということと、 家の鍵をなくして往生した。入れたはずの手提げ袋に入ってないのだ。 何日かたってからだが鍵は付け替えることにした。 パーの袋をまとめて置いてあるところにあった。一 それから十日ほどたって、思い それよりわが家は表通りに面し ただ外出先か 丸山弘子

出した。 がら、どこまでも平らな苫小牧の道をふたりでひた走る。 り分の自転車を購入した。涼しい風を全身に受け、歩道にかぶさるように伸びている草をよけな ◆モンゴルから北海道に移り、 ハルとふたりの小さな自転車の旅の思い出が、 生活が少しずつ落ち着いてきた。 少しずつ増えてきた。 自分が自転車を好きだったことを思い 車に乗らない私は、 まず、ふた 山内ゆう子

集後記

過ごしやすい山形の夏であった。 アコンは一度も使っていない。 いていない。 山形はというと、そうでもなかった。 暑さ」「二、三日涼しくなったけれども、 東京の 断水になった市町村もあった。が、その後の夏日はあっという間に過ぎてしまった感じが 人から い日もあることはあったのだが、考えてみるとサンダルを履いていない、 毎年ひと通り着るはずの夏服は、半分も出さないで終わってしまった。 は、 この夏の挨拶として「死にそうな暑さ」「これまでに経験したことのな 寝苦しい夜は少なかったし、 七月下旬、 また辛い暑さが続いている」等々が聞かれた。 豪雨で取水池の水の濁りが収まらなくて供給で 東京の人たちには申し訳ないような もちろんエ 短パンもは V 、っぽう

いや、 粉は、 んぼ、 千波万波」 形市の市制施行一○○年記念事業として国際的なイベントを行うことが決まったとき、 生まれた作品群の上映があった。 そのプレイベントとして「映画作家 一九八九年。 メンタリー れた環境かもしれないが、 が生き物かと思えるほど小さなお蚕さまのときは、柔らかい桑の葉を刻んで食べさせる。稲 いやあ、おもしろかった! 自分にとっては、ほとんどが初めて観る映画。 画を撮りつづけた小川紳介とは、小川プロダクションとは何だったのかを振り返る試みだった。 ことしの十月 どちらも子どものころから身近にあったはずなのに、実体をまったく知らなかった。 知ろうとしなかったのだ。映像は多弁で、 気象条件がそろったとき数時間のうちに奇跡のように行われる。なんにも知らなかった。 部門では、沖縄・高江のヘリパッド基地反対闘争を撮った『標的の村』 映画祭を」と提唱したのは小川紳介監督だったという。 初めて出合う山形国際ドキュメンタリ ~十七日まで)、二年に一度の 知ることは楽しかった。 山形の上山(かみのやま)市に移り住み、 小川紳介 山形を穫る」と題し、二日間にわたって山形で 無知な自分を認めることになった。すでに失わ 山形国際ドキュメンタリ ー映画祭、とても楽しみだ。 小川紳介監督の撮った映画は宝である。 この映画祭が始まったのは ー映画祭が開 お蚕(ご)さま、 地元の人とともに映 そして の上映が決まっ ・「アジア 「ドキュ か これ る。

季刊 展景 71号

二〇一三年九月二十八日 発行

編集·発行人 布宮慈子

オンライン版制作 堀 哲郎

muninokai.com 無二の会「展景」発行所